

骨量バランスを見極めることが可能となる。

例として、図9に鉄骨量と接合部の関係を示す。各プロットが実現可能な構造を示しており、解析回数を重ねるにつれ、鉄骨量(横軸)と接合部数(縦軸)は徐々に減少する方向になるが、必ずしも最小鉄骨量のデザイン=最小接合部数のデザインの関係とならないことが分かる。

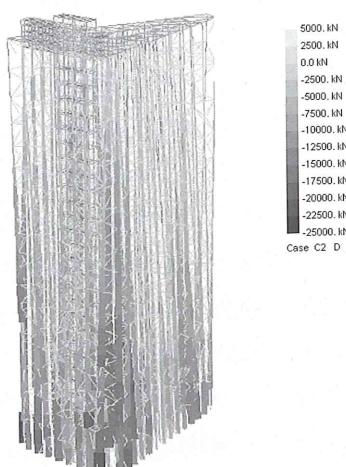
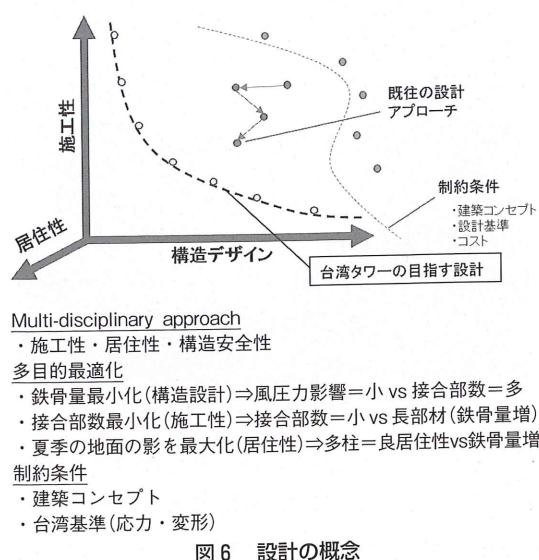


図7 自動的に生成した構造解析モデル ©Arup

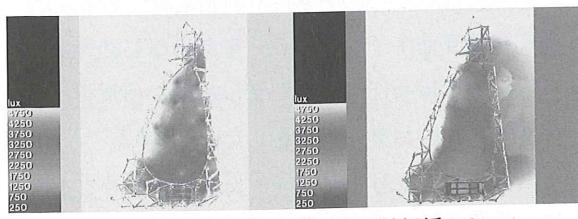


図8 真夏の14時及び16時の光環境解析 ©Arup

軸)は徐々に減少する方向になるが、必ずしも最小鉄骨量のデザイン=最小接合部数のデザインの関係とならないことが分かる。

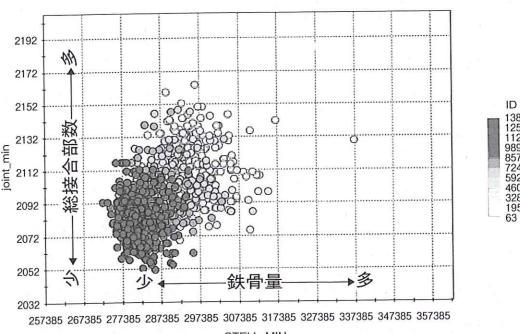


図9 鉄骨量と接合部数の関係(各点が1設計)

このようなパラメトリックモデリングと設計のルーティン化(自動化)によって、「ある側面では最適な設計だが別の側面ではそうでもない」といった優劣をつけることができないオプションを複数提案することが可能になる。一方で、ルーティンを実現するために、建物の性能に影響するキーファクターを絞っている上で成立していることをエンジニアは留意する必要がある。

## 5 おわりに

本稿では、製作の侧面、設計の侧面の二つのルーティンを活用したジオメトリックエンジニアリングを紹介した。コンピュータの発達に伴い、高度なルーティン化が実現し、エンジニアがより創造的なエンジニアリングに集中することが可能になる。そして、新たなルーティンやその幅を広げることもまたエンジニアの役割である。これによって、ステイクホルダーに新たな価値をもたらすことにつながるだろう。

一方で、エンジニアはこのようなルーティンが制約の上で実現されており、必ずしも透明性のあるソリューションを提供するわけではないという点を忘れてはならない。

# 伝統芸能を次世代へ

## —型の再生に挑む—

小野木 豊昭

伝統芸能プロデューサー／(有)古典空間 代表

### 1 はじめに

「芸能」は一体どの段階から「伝統芸能」になるのだろうか。

人々に支持された表現は、求められて繰り返し上演されることになる。そのプロセスで無駄な箇所は省かれたり改善されたりなどする。評価の高い箇所はより洗練されて表現としてまた作品として高められていく。反復上演は表現の様式化を生み「型」に昇華する。さらに多くの観衆聴衆を得ると他の表現者による摸倣が起こる。当初の表現者は自らの表現の正統性を主張するなど、競合相手との表現のクオリティや興行上の優劣を競うなどの構造が生まれる中で伝承の意識が生じる。後継者として自他ともに認める者が現れると、自らの表現と築いた立場を継承させる。

こうした事象の継続に価値が認められて、「伝統」という言葉が付与されたのではないかと考える。しかし、「伝統」というブランドを冠した段階で芸の深化と同時に権威化をも伴う傾向があり、さらに守勢が前面に出ると徐々に同時代性が希薄になり社会と乖離していく。現在、全国各地で様々な伝統芸能が伝承され演じられているが、上記は主に劇場上演を活動主体とする芸能の一考察に過ぎないことを共有しておきたい。

「伝統」とは「何らかの価値観を共有する者の中で、有形、無形を問わず受け継がれ、未来に向けて受け渡していく意味のある事象」と解釈される。したがって、次世代への継承に価値を認める

ならば、芸能自体を継承する人材の育成と、その受け皿としての社会の意識及び教育を始めとする諸制度の「変革」が不可欠と言えよう。時間はかかるが、多種多様な芸能毎に丁寧な取組みが求められているのである。

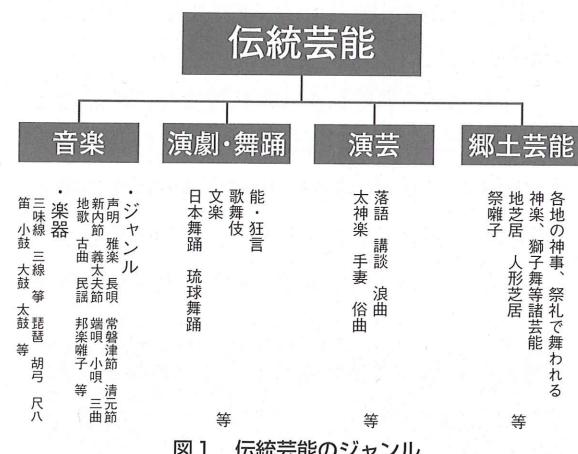


図1 伝統芸能のジャンル

歌、語り、演奏、舞踊、芝居、人形芝居、さらに分類不可能な数々の身体表現、時代とともに様々な芸能が生まれてきた。衣食住の延長にある、観て、聴いて、歌って、踊っては、明日の活力として機能する。つまり、社会の活性化にとって必須の「文化」なのである。しかも、日本という風土に生まれた文化の故、精神的拠り所つまりアイデンティティとして私たちを支え、時代とともに日々の生活を彩り、各地域ひいては日本の社会を形成してきたのである。

近代以降、日本のあらゆる局面における欧米化は「日本文化」の色彩を薄め続けてきた。そして

IT社会を迎えるに至り、さらに欧米化さえ軽く飛び越える勢いで急激に文化的境界線を消し去りつつある現状は、自らの精神的拠り所の喪失感をますます助長する故か、行き先の見えない不安感が社会を覆っている。特に地域の社会構造の変化が著しいが、経済的側面のみならず文化的求心力を失ってしまったことも大きな要因と考えられる。地域の活性化にこそ、「様式」や「型」を基盤に継承されてきた祭や儀礼、それらに伴う諸芸能など伝統文化の再認識がアイデンティティの再構築につながり、地域再生に大きな力を発揮するものと言えよう(※東日本大震災の復興において、伝承されてきた芸能の復活にいち早く取り組んだ地域に著しい成果が見られている事例に注目したい)。

一旦断ち切られてしまった伝統文化の再認識と再生は容易な作業ではないが、「伝統」の価値への共感とその共有こそが、現代社会が抱える諸問題の改善に資するを考える故に、芸能の側面から様々な試みに挑み続けるのである。音楽、身体表現、語り芸について企画のフィルターを通して私たちが展開した最近の事例を以下に紹介したい。

## 2 <徳島邦楽ルネッサンス「日本音楽の魅力再発見！」～西洋音楽の達人が邦楽の扉を開ける～～音楽からのアプローチ～

毎年8月、徳島県を挙げての盛り上がりを見せる「阿波踊り」では長唄三味線を中心とした主に細棹三味線が不可欠であり、さらに「人形浄瑠璃」のナビゲーター役である義太夫節では太棹の義太夫三味線が使われる。日本でも有数の楽器売上げ数を誇る“三味線王国”と言われる背景である。県の文化事業の牽引役として(公社)徳島県文化振興財団は、この地域的特色を事業展開の中核の一つに据えている。

2013年度よりスタートしたく徳島邦楽ルネッサンス>シリーズでは、あわぎんホール(徳島県郷土文化会館)において年度内3公演を実施。徳島県出身で数多くの邦楽曲を世に問うた作曲家・三木稔の作品を紹介する公演や、新作人形浄瑠璃公演、異端の三味線奏者たちを集めた公演、日本舞踊と邦楽囃子による創作公演など、伝統音楽の再生と振興に貢献する「実験」を意欲的に続けていく。



図2 <徳島邦楽ルネッサンス>公演ポスター

その中でも2016年3月、若い世代への普及を目的に実施したのが、<徳島邦楽ルネッサンス 第3章 現代を生きる邦楽>「日本音楽の魅力再発見！～西洋音楽の達人が日本音楽の扉を開ける～」である。「題名のない音楽会」などメディアでも馴染みのある音楽家・青島広志氏をナビゲーターに起用し、歌口が2枚リードで共通の筆箋とオーボエ、双方の代表曲「越天楽」と「白鳥の湖」を交換して演奏するなど、音色と奏法を比較しつ

つ邦楽器と西洋楽器の魅力を楽しくお伝えする演奏会である。

胡弓とバイオリン、尺八とフルート、三味線とギターなどの対比も世代を超えて会場の興味、盛り上がりを誘い、最後は出演者全員で宮城道雄の「春の海」を演奏。青島氏が初めて本格的に取り組む邦楽公演でもあった。翌日は地元の邦楽演奏家の皆さまのご協力を得て、施設全体を使って様々な邦楽器の体験ワークショップを実施。さらに津軽三味線・和太鼓と洋楽器によるバンドや胡弓とピアノのユニットなど若手奏者たちの迫力とグループ感あふれるライブで締め括った。

小・中学生を始めとする次世代に対して、「堅苦しい」「難しそう」という先入観を取り去り、伝統音楽の楽しさを多角的に「体感」していただく仕掛けをひんやりに採り入れた新しい魅せ方である。

## 3 <日本舞踊家集団 弧の会>～身体表現への注目～

身体表現系の試みとしては、日本舞踊家集団・弧の会を挙げたい。

江戸時代に幕府の式楽として主に体制側の武士に愛好され庇護を受けつつ伝承してきた能楽(能・狂言)と対象的に、日本舞踊は主に庶民が支持基盤と言えよう。能楽を始めとする様々な先行芸能を柔軟に取り込み、歌舞伎とともに発展してきた背景から、日常の写実的な動きを洗練して見せる様式美が特徴で、歌舞伎俳優の“必修科目”でもある。

したがって、舞台芸術の一ジャンルとして大成した日本舞踊の面白さや格好良さに触れることで伝統文化への間口は大きく広がるものと考えている。しかし、数多くの流派が存在する意味や継承における御家騒動等々、日本舞踊界自体の解り難

さや近寄り難さは否めず、多くの改善課題があることも事実であり、伝統芸能の中でも縁遠い存在であることは事実であろう。

そんな現状に対して、“日本の踊り、伝統的な身体表現の素晴らしさを未来へ繋げよう”という思いから一線で活躍する男性日本舞踊家たちが流れ派を超えて集まったユニットが「弧の会」である。衣裳・化粧・鬘などのいわゆる「拵え」をしない「素踊り」「群舞」がコンセプトとなっていいる。紋付、袴のみで挑むごまかしの効かない表現は、人の姿の美しさ、そして圧倒的な緊張感と迫力に満ちている。

1998年の結成以来、数々の新作舞踊を発表し、全国各地で日本舞踊公演を開催。中でも2000年初演の『御柱祭』は、新作では異例の50回を超える再演を重ね大反響を呼んでいる。「ジャンプ」や「側転」など通常の日本舞踊にはない激しい動きも、基本が浸透している身体を通すとどこまでも日本舞踊に映るのである。



写真1 弧の会代表作「御柱祭」より

古典作品も遡れば初演時は「新作」であった。現代作品と言えども将来的に「古典」となり得るか、その試金石となる作品に取り組んでいるので

ある。またメンバーによる演目間のトークの面白さ、楽しさも人気の背景として特筆されよう。

さらに「弧の会」は舞台公演のみならず、子どもたちや日本舞踊体験希望者に対するワークショップや日本舞踊紹介のためのレクチャーデモンストレーションを盛んに行い高い評価を得ている。初体験でも分かりやすい「目標と成果」を参加者と共有しつつ進行するプログラムは、伝統芸能普及のモデルケースとして位置付けられる。今最も熱い注目を浴びる日本舞踊家集団である。

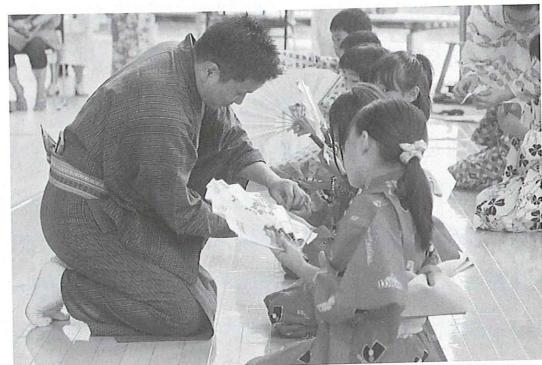


写真2 ワークショップ風景



写真3 長崎県諫早文化会館公演にて観客の皆様と  
(2016年7月)

#### 4 <ザ・忠臣蔵ナイト>～「語り芸」の再生～

多くの人々に愛されてきた「忠臣蔵」の物語ではあるが、若い世代にとっては既に未知の領域である。さらに「落語」以外の伝統語り芸には触れる機会が乏しく、「講談」や「浪曲」の存在すら知らない方が増加の一途をたどっている。「唸って語れば“絵”が見える」、語り手の発する言葉

が聴衆の脳裏で「絵」に変換され、その絵がさらに映像化されてドラマを描く。日本には「語り芸」という一大ジャンルがあること、そしてその価値を再認識したい。都市部では24時間明るく夜の闇はほとんど消滅してしまった。暗闇の存在が喚起する想像力の潜在的な欠乏感が“落語ブーム”的背景とは言えないだろうか。

「忠臣蔵」に内在する人間ドラマを伝えたい、「講談」「浪曲」そして数々の「淨瑠璃」など伝統語り芸の楽しさ、奥深さを伝えたい、そんなコンセプトで生まれた企画が「ザ・忠臣蔵ナイト」なのである。

分かりやすく迫力満点の淨瑠璃「義太夫節」で松の廊下「殿中刃傷の段」、浅野内匠頭の切腹を「落語」の名作「淀五郎」、そして吉良邸への討入りを「講談」赤穂義士銘々伝より「大高源吾」で綴るものだが、出演者も一線で活躍中の巧者を揃え、松の廊下など本物の歌舞伎の舞台セットを背景にお届けしている。



写真4 「殿中松の廊下」前にて義太夫節演奏

一晩で「忠臣蔵」が分かり、一晩で日本の伝統語り芸の至芸に触れられるという贅沢な企画である。有名落語家による単なる寄席の再現ではなく、明確なテーマと演出を加えた新しい魅せ方こそ伝統語り芸の普及に不可欠の要素と考えている。

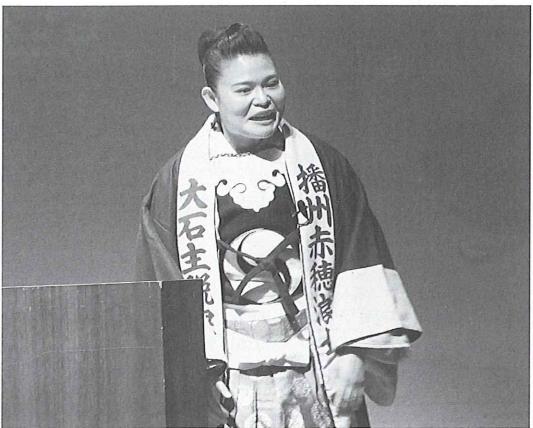


写真5 女流講談師による進行



写真6 「ザ・忠臣蔵ナイト」公演チラシ

#### 5 伝統芸能を次世代へ～地域振興、教育との連携も視野に～

開催国の「文化」をも内外に広く知らしめる「文化事業としての側面」を強く有するオリンピック・パラリンピックが間近に迫っている。浮足立つことなく地に足を着けて自らの文化と向き合う

絶好の機会と捉えるべきである。「期限付きの結果こそ最優先」とする経済の論理を尺度とするのではなく、「伝統文化をも確かな基盤とする文化立国」の姿を明確に描き、2020年はあくまでも通過点と考え、時間をかけて着地点に向かう覚悟が求められているのではないだろうか。

芸能ジャンルや作品は、存在自体や再演の価値を喪失した段階で消滅する。故に現在まで繰り返し上演され、「伝統芸能」として継承されている意味を再考、熟考する意義は大きく、日本の文化的色彩が薄まりつつある現在、伝承する側にも受け止める観衆、聴衆側にもそのラストチャンスとなることであろう。

「型」については、表面的な理解に留まることなく、その形成の過程にあった時代背景やさらに不可視の精神性に触れる体験などは、特に次世代を担う子どもたちにとって大きな刺激となるはずである。地域振興や教育事業との連携をも図りつつ、伝統芸能と現代社会との接点づくりに、引き続き積極的に努めたいと考えている。



写真6 小学校へのアウトリーチ